愛知淑徳大学論集 ―コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇― 第8号 2008 1－11

# 文学の根差しと文化の融合

## ―― 陳舜臣の推理小説『枯草の根』について ――

曹　志偉[※1]

### はじめに

陳舜臣は処女作『枯草の根』で江戸川乱歩賞を受賞して文壇に登場した。その創作過程は彼にとって，「自分のルーツを辿る旅」であるといえよう。『枯草の根』は推理小説ではあるが，同時に時代色豊かな作品で，物語は主に日中文化の背景と現代歴史空間の上で展開される。

『枯草の根』は推理小説の受賞作品として，日本の文壇に一定の影響を与え，主人公の陶展文は日本推理小説中の独創的な「名探偵」の一人に数えられるようになった。以下が江戸川乱歩賞審査員の評論である。「入選作『枯草の根』は，これという欠点がなく，長所だけが心に残った。登場人物の多くは神戸に住む中国人なのだが，それらの人物の悠々たる大陸的風格や，中国ふうの道義観がよく出ている。殊に素人探偵役の中国人の性格が非常に面白く描かれている。文章もゆっくりとおちついた，おとならしい語り口で，適度のユーモアをまじえ，噛みしめるような味を持っている。これらの点がこの作の最大の特徴だと思う。……その上に，中国語のいろいろな引用語があり，漢文での筆談の話があったりして，それらがエキゾッチクな魅力のある装飾となっていることも見のがせない。中国語を和訳した日記の文章や，幕切れに出てくる祭文なども名文で，殊にこの幕切れが利いている。あと味がたいへんよろしい。」[※2]

以上の評論からもこの作品が当時に与えた影響が窺え，さらにこの作品の風格と特徴を反映することができる。例えば，「大陸の風格」，「道義観」，「エキゾチックな魅力」などは全てこの作品の独特な風格と異文化の高い芸術性を証明している。筆者は先行研究と評論の土台の上で，さらに陳舜臣という作家の文学創作の出発点から，その作品中で文化の根幹を追い求める上での文学の根差しと文化の融合を検討する。これは陳舜臣文学の独特な意義を理解する上で非常に重要な助けとなるであろう。

この作品は陶展文という独特な華人探偵を作り上げることに成功した。主人公・陶展文は武術はできないが義侠心に溢れ，漢方医学に精通し中国象棋もできる。陶展文の患者である徐銘義が殺害されたため，陶展文は三つの帳簿をもとに手がかりを探り，新聞記者の小島と一緒に事件を解明していく。この作品は起伏のあるストーリー展開にスリルな情景，登場人物の個性的な性格描写で構成され，最大の特徴は作者の人間性溢れる徹底した人物分析にある。小説中の探偵陶展文は細やかな調査と鋭い洞察力により，殺人事件の裏には必ず隠された人生の宿命的秘密があるという結論に達する。作家は推理小説特有のトリック設定を用いる技法で，それらを次々に解明し，事件の全貌

---

※1　外国語教育センター

※2　新保博久・山前譲編　1996『江戸川乱歩賞・日本探偵小説事典』283

を徐々に明らかにするという推理小説特有の書き方を採っている。この作品が人々を惹きつける魅力は不可解なスリルが伴う危険な場面の描写ではなく，人物の性格と心理的な内面の洞察力である。作家は普段覗くことのできない人間意識の心奥底にまで筆を伸ばし，その張り詰めた神経を一つ一つ紐解いていくことから，「人間派」の推理小説と称される。

## １．社会と戦争の「根」を探して

この作品中の登場人物には異なる過去と現在があり，彼らの思想，道徳，価値観から引き出された恩讐と憎しみは日中両文化の衝突による結果だけではなく，さらには深い社会の根源――戦争も直接関係している。この作品は読者に罪悪の戦争と動乱がなければ，陶展文は国を支える人材になり，偽者の李源良も犯人ではなく，席有仁も大金持ちではなかったかもしれないと考えさせる。このような構成は歴史的空間を逆に推理して描く方法で，作品の魅力を引き立たせて，人々に想像空間を与える。

この作品は場面の移動と置き換えによる表現方法を用いており，物語の歴史舞台を日本から中国に移し，また中国から日本に移し変えている。殺人事件は神戸で発生したが，その原因は上海にあり，さらにその背後には密接に戦争と何らか関係している。この作品は読者を社会の根源と人間性の根本を探す旅に誘い，読者はまるで「時間のトンネル」にいるように現実と歴史が交差している。殺人事件の真相究明は探偵と犯人のただの追跡関係ではなく，その過程を歴史舞台下の複雑な社会背景の中に置いている。小説中に登場する日中関係にある人物の性格は全て社会の動乱，歴史の移り変わり，漂泊経験によって形成されたもので，決して国籍や民族によって形成されていなく，さらに言えば人間性によって形成されたものである。このような描写方法は多元文化を経験し，また戦争の傷跡を負った人間にしかできない。そして，作品は同情に値する殺人犯である偽者の李源良を作り上げた。彼の本名は李東昌で李源良に成り済まし，真実を明らかにされるのを恐れたため，真相を知っている徐銘義を殺害した。李東昌は人々が知らない自慢すべき過去を持っていた。作品には以下のように書かれている。

> 私も熱烈な愛国者だった。衰亡に瀕した祖国を甦らせるには，まず国力・国富を増進させるべきである。自分の専攻した学問から，私は国の経済力を高める夢をえがいた。学生時代，私はひそかに「中国経済進展要網」という題で，途方もない計画書を作成したものだ。そこでは，天津が十五の突堤をもつ不凍港となり，揚子江の河口に上海にとってかわる大都市が建設されることになっていた。……李源良の父親が死んで，私の時代が到来した。銀行は完全に私の支配におかれた。私はべつにこれといった役にはつかなかった。李源良の秘書――それだけで結構。いまや，李源良は私そのものなのだから※3。

李東昌は若い頃，未来に対して素晴らしいあこがれがあり，その理想を現実にするために屈辱に耐えた経歴を持っているため，彼は他人の影となって暮らすことを不服とし，李源良としての自分

---

※3　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　159-160

であるべき「本当の姿」を回復しようとした。しかし現実は残酷で彼の夢は破れた。彼の経歴は華人の生活の多様性と曲折性を反映している。華人社会には実に様々な人間がいて，神戸に来た理由も人それぞれである。偽者の李源良は陶展文と違って，彼の生活基盤は中国にある。もし戦争がなければ彼の理想は実現したかもしれないが，戦争と中国国内の様々な原因により彼の夢が泡と消えた。しかし彼はそれでも理想を追求することを諦めることなく，理想実現のために神戸を訪れた。彼の紳士的で優雅な外見の裏には同情すべき辛い過去があったのだ。彼は神戸華人社会の一つの側面を代表している。

作品は李東昌の少年時代の激情，青年時代の抱負，中年時代の失望を手掛かりに，歴史と現実を交差させ，その内在的繋がりを描写する。更にその失敗した人生を日中社会の背景において物語を展開していく。作品は李東昌の人間性の根源を探る上で，殺人犯にまで落ちぶれたが，その良心も完全に喪失していない心理的矛盾，感情の苦しみを非常にリアルに再現した。その表現は李東昌が戦争によって，人生が変わり破滅の道に進んだ悲劇に色合いを添える。また読者に李東昌を同情すると共に戦争の残酷さを再認識させる。李東昌は自殺前に，自分の悲痛な心境を語っている。「あなたは私に猶予を与えてくれた。その厚意を謝したい。また私を信用してくれた……。だが安心していただきたい。こんど私が片付けるのは，ほかならぬこの私自身なのだから。」※4 従って，探偵陶展文の寛容と仁慈に満ちたその態度が，犯罪者の傷だらけの絶望の内心を慰めた。李東昌は自分の夢が消えて精神的ダメージを受けたので，自殺をする道を選んだのだ。それに対し理解が出来ない小島に，陶展文はこのように説明する。「君だって生命より大切なものがあったら，それを守るために，気ちがいになりはせんだろうか？」そう言って，陶展文はやおら立ち上がった。「わしだって，自分で保証はできんよ。幸か不幸か，一つのことにうちこむことはできなかったが」※5 これは現実の中で，人間が絶望のどん底にいる時には理性を失うが，寛容と同情を得た時には人間の善良な一面が再び蘇ることの表れである。これは犯罪者を「人間」として描き出す方法で，人間は絶望のどん底にあっても，ほんの一瞬で魂の奥底にある人間性が蘇ることを暗示している。

戦争と人間の運命は文学表現の永遠の主題であると言われる。この作品は人間性と人類の文明を踏みにじる戦争の真実を明らかにしようとしていて，戦争が人々の心に残した傷跡が事細かに描かれている。戦争の動乱の中で李東昌は異国の地を漂浪し，それでも昔の夢を実現するために自分の運命と戦う。彼の心は残酷な現実に虐げられ，最後には夢の現実のためには手段を問わない邪道に落ちた。作品はこの経過を中国の伝統文学の儒教の道徳である「人之初性本善」の角度から着目し，倒叙法の手段を用いて，殺人犯の戦争によって踏みにじられた「善良」な本性を描いている。罪悪と正義の前に，犯人は探偵の陶展文の仁慈に感動し，自分の残虐な行為を後悔する。この内容から作家の人間性に対する洞察力を窺がうことができる。戦争により運命が変えられることがあっても，人間の本性までは変えることができない。人間は絶望した時に罪を犯す道を選ぶが，最終的には自ら自分の良心に責められるという過程が描かれている。

この作品は戦争下の人々の境遇だけではなく，戦時中に特別な環境に置かれた華人の生活をも切

※4　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　176
※5　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　181

実に描いている。しかし作品は正面から戦争の残酷さや戦争の発動者を批判してはいない。これは恐らく作家が日本社会の言論環境，もしくはその当時の歴史現状に左右されたのか，或いは日本文学における審美意識の影響を受けたためだと思われる。

戦後日本は戦争の暗い影から抜け出したが，戦争が人々に与えた精神的なダメージと傷跡は未だに完全に消えたわけではない。日中両国は戦争状態が終わったものの，まだ正常な外交関係を回復していない。文化交流の方面においても，かつて両国の戦争状態を反映する文学作品が現れていない。こうした状況の中で，この作品は独特の歴史的視点から，世間が華人という「忘れられた存在」に対する注目を引き出したと高く評価しても過言ではない。

## 2．中国文化の大地に文学の「根」を下して

文学の土壌は文化であり，また文学は文化の表現手段の一つとして理解することができ，更に文化を交流する「言語」として捉えることもできる。「言語」は異文化間伝達中で特別な役割を担っている。そのため，異国情緒が漂う日常生活の表現は，最も異文化の読者の興味を引きつけることができる。それゆえ，作家はこの作品の中で多くの中国伝統文化を紹介し，さらに中国象棋，漢方医学，拳法などの特有な中国文化を小説中の至るところに散りばめている。『枯草の根』という題名には，異国の地に生きる海外華人が永遠に自分の夢を故国に残していること，そしてどこにいようとも彼らの生命の根が祖国の広大な土壌の底に深く植えつけられ，運命を共にすることを意味しているのだろう。

日本の推理小説は長い歴史があり，他国と比べても作家数が多く影響も強いといえよう。『枯草の根』という作品は，戦後日本の推理小説の第3次ブームの中で生まれたものである。作家はこの推理小説の中で「人間派」と言われる中国人名探偵の陶展文の姿を描いただけではなく，最も重要なのは，その国の主流文化と共に生きる華人社会を紹介することによって，自分の文学創作に新たな視野を見出したことである。作品『枯草の根』の主人公である名探偵の陶展文は，日本の推理小説の中で初めて登場した中国人の探偵である。この人物は西洋探偵小説家であるロナルド・ノックスが唱えた「探偵小説十戒」の中の第五戒を覆した。その第五戒とは中国人は探偵になれないという持論である。ロナルド・ノックスは「(探偵小説に)中国人を登場させてはならない。――なぜならないのか，その理由を説明するのはむずかしい。我々西洋人には中国人をもくして，頭脳においておそろしく秀でており，道徳方面では冷酷単純である，というふうに考える習慣があるからだとでもいっておこうか」[※6] とこう断言した。これは明らかに根拠のない偏見である。『枯草の根』中では，探偵は西洋のように手に虫メガネを持ち，事件現場を調査することに拘らず，また物語にも義侠の身分で凶悪場面を再現していない。なぜならば，陶展文という探偵は犯人の心理を徹底的に分析し，その行動を判断できるからである。彼はまるで安楽イスに座り，泰然自若な儒者風格を兼ね備えた風格の探偵であり，また良好な教育を受け，豊かな経験と見聞を併せ持つ華人のイメージでもある。それゆえ，明らかにロナルド・ノックスの提唱した中国人が探偵になれない持論は，いかに根拠のない偏見であるかを見事に立証した。『枯草の根』という作品から，陶展文という人

※6　権田萬治　2003「枯草の根」『陳舜臣読本　Who is　陳舜臣？』集英社　31

物は儒家風格のある名探偵として，また陳舜臣の推理小説シリーズ中で，東方文化を背景に持つ名探偵像として次から次へと登場する。『枯草の根』の中で陶展文の人物像について，以下の節がある。

> 陶展文は一風変わった経歴の持主である。華僑には珍しい陝西の産で，官吏をしていた父の任地福建で育った。若いころ日本に留学して法律を学んだ。高等学校も大学も東京だったので，標準語は達者である。数年間帰国したが，どういうわけか，また日本に居ついてしまい，日本の女性と結婚した。彼の父は拳法家として有名な人物で，彼は幼少のころから拳法の練習をする。……料理のほうはいつのまにやら身につけてしまったもので，いささか我流なのである。南方料理でもなければ北方のものでもない。料理のほか，陶展文は漢薬の研究にも手を出し，いまでは世間からひとかどの漢方医と認められている[※7]。

陶展文は政治に関わったために，異国の地に逃れてきた。彼は中華料理屋を経営して生計を立てていたが，自分の精力を料理屋に向けなかった。彼は退屈で仕方が無い毎日を送り，自分の現状に不満を抱えているようで，毎日漢方医学や拳法などに没頭して生活を送っている。彼の内心には同情心と邪悪を敵視する正義感が溢れている。彼は落ちぶれて各地を放浪していた徐銘義に同情し，李源良に度を超えた寛容な態度で接したが，政客吉田庄造に対しては傍観者として冷静に観察し，軽視の眼差を送っている。それに加えて，陶展文は日本で高等学校や大学の教育を受けた経歴があり，日本人を妻とした生活背景もある。彼は日中両国の文化が凝縮された典型的な華人像なのだ。この作品の意図は，日本と中国に繋がる人物の背景を通じて，在日華人社会を明らかにし，日本社会からこの特別な団体への関心を引き起こすことにあると思われる。その意味で，陶展文の意識は華人社会の「道義観」を反映している。

作品の中で陶展文が他の探偵と明らかに違う所は，彼が西洋の探偵の持つ神秘的で固定した威厳あるイメージをがらりと変えたことである。彼は超人的な能力を持たなく，武術にも秀でていないため，天下を変えることができる英雄ではない。しかし，陶展文は漢方医学に精通し中国象棋も上手なため，象棋から殺人事件の重要な手がかりを見つけた。彼は義侠と仁慈に満ちた新しいタイプの探偵である。なぜ義侠なのかというと，彼は趣味で探偵をしているため，金儲けやビジネスとは関係なく自分の良心に従うからだ。またなぜ仁慈なのかというと，彼は偽者の李源良を警察に通報しなかったことで，犯人に自分自身から良心の呵責を問いただせたのだ。善良な人間にさらなる打撃を加えないために，偽者の李源良が死んでからも陶展文はその秘密を守っただけでなく，更に彼のために追悼会を開いた。これこそが「仁慈」なのである。偽者の李源良の追悼会で，陶展文は「地中深く張り，まわりの土壌とすっかりなじんだ強靭な根が，にわかに草を失ってしまった。これまで人びとは，土のうえの草しかみていない。根はなおも，いやこれからもっと強く，生きつづけようとするのに。」[※8] という弔辞を心の奥で密かに呟いた。この「草」と「根」に関する奥深い

---

※7　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　15-16
※8　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　183

論述は，作品の肝心な締めくくりの言葉となり，彼の内心からこみ上げた「弔辞」であり，彼の人生に対する運命の考え方そのものでもある。作品の物語には放浪者の苦い経験や内心の苦痛の心情がふんだんに盛り込まれている。その意味でも，これは人間社会の最も真実の姿であり，華人の根気強い精神の象徴であると理解できるだろう。

評論家権田萬治は「『枯草の根』に登場する人物は，二・三の例外を除くと大半が中国人である。……これらの中国人がふしぎな実在感と個性的魅力をもって描き出されているが，これには，単なる著者自身が中国人であるという事実ばかりでなく，陳舜臣の生家が貿易商で，長い間氏自身，外国貿易の通信担当者をつとめ，中国人貿易人の表裏を知りつくしていることが大いにあずかって力あったに相違ない。」[※9] と指摘した。この作品中で描き出された人物の独特な「道義観」は，日本人にとって異国情緒が漂う特別な魅力を持っている。読者はこの作品を通じて，華人社会の異なる文化背景に気づき，日本主流社会以外の特別な団体に関心を持ち，華人社会も日本社会の一部分であることを再意識するようになるだろう。このような作品の視野は当時の日本文学において例のないことであろう。更に言えば，この作品の現実的意義は，日本文学が戦後の社会のありのままの姿を描くために，日本文化の一部分とも言える中国文化を再認識する新たな視野を与えたと評価できる。

この作品は探偵陶展文と犯人李東昌以外に，もう一人重要人物がいる。それは被害者である徐銘義である。彼ら三人の登場人物は中国象棋の愛好者であった。陶展文と徐銘義は医者と患者の関係であり，さらに李東昌と徐銘義は古い同僚である。小説は徐銘義が殺害されたことを手がかりに，探偵陶展文を中心に息を呑むようなスリル満点な物語を展開している。徐銘義はアパート経営と高利貸しで生計を立てる古い時代の人間で，作品には以下のように描かれている。

> 徐銘義はたしかに手に負えない患者で，陶展文をさんざんてこずらせたものだ。それでも，彼はながいあいだの友人である。商売柄，人の恨みを買うことがあるかもしれないが，殺されてあたりまえというほどの悪人ではない。むしろ善良な男だ。貸金返済のきびしい催促は，貪婪というよりは，彼の几帳面さがさせたことであった[※10]。

陶展文から見れば，徐銘義は輝かしい過去と厳しい現実を持ち合わせている人物である。陶展文は徐銘義が金銭に対して貪欲で，何事にも神経質で細かい人物であるにも関わらず，彼が旧時代の人間特有な真面目で誠実な一面を持っていることを知っていた。そのため陶展文は殺人事件の背後には，きっと何か普通と違う恩讐が隠れていると信じていた。徐銘義はかつて上海興祥隆銀行の職員であったが，その銀行が戦時中に倒産したため，香港を経由に神戸にやってきた。この一見平凡な人間の背後には，戦争・時代・社会という暗い影があり，また旧中国の背景もある。それゆえ，この人物の背後には日中二つの社会が交差する時代の息吹が凝縮されており，更に華人が故郷を離れて各地を彷徨う雰囲気が漂う。このような背景と作者の心境は共鳴し合っているに違いない。こ

---

※9　権田萬治　2003「枯草の根」『陳舜臣読本　Who is　陳舜臣？』集英社　31
※10　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　51-52

の三人以外に，作品の中には，もう一人忘れてはならない席有仁という肝心な人物がいる。物語の複雑に入り組むプロットや恩讐はすべて席有仁という人物に関わりがあり，さらにこの人物は中国の伝統な富豪の特徴がある。

> 席有仁自身は，いまやかくれない大富豪で，どこへ出ても第一流の人物として扱われた。だが，少年時代には極貧の生活を経験し，シンガポールの埠頭で苦力として働いたこともあった。初老になるまで，彼の生活は悪戦苦闘の連続だった。功成り名遂げて以来，彼は紳士淑女の社交場裡におしこまれてしまった。ここ十数年来のことである。お上品な連中のなかにいると，彼はこみあげてくる違和感をどうすることもできない[※11]。

席有仁の波乱万丈な人生経歴は海外華人の成功者の縮図である。彼にも貧困な過去があり，李源良は彼の会社が倒産に瀕する際に，援助の手を差し伸べて彼を瀬戸際の所で救った。そのため彼は恩返しの思いで神戸にやって来たのだ。彼の人間像には中国の伝統的な道徳の面影を見ることができる。それは直接で豪快な恩返しの美徳である。席有仁という人物からは人間の本当の義理と人情が感じられ，また「僅かの恩を全力で報いる」という中国の伝統な人生哲学も窺がうことができる。

## 3．日本社会の風土に文学を「根」差して

一般的に華人文学においてよく取り上げられる主題は二つある。一つは華人が外国で差別されることで，もう一つは華人の後代が中国の伝統文化に反発することである。しかし，『枯草の根』という作品には，このような見慣れた内容がなく，神戸華人が漂泊の末に定住する「浮き根」から「根差し」過程が描かれている。これは陳舜臣文学の特徴の一つと言えよう。この作品では神戸の華人が強靭で粘り強い根のように，自分の生活の根を日本社会の風土に根差す精神が生き生きと表現されている。彼らは戦争によって引き起こされた「漂泊感」から抜け出そうとする同時に，積極的に異国社会に溶け込む方法を探っている。

作家はこの物語を通して，悠久なる歴史と社会背景の中で日中文化の根源を探索している。陳舜臣の文学創作は日中両国の社会を背景として，個性豊かな人物が描かれているだけではなく，これらの人物の性格は，全て多元文化の中で培われた独特なものでもある。これは作家本人の出身や二つの文化中で形成された独自の審美眼と密接な関係があると考えられる。評論家奈良本辰也は「陳氏は原籍を中国台湾にもつ人である。そしてまたきっすい神戸っ子でもある。だから氏の史眼はつねに複眼となって，中国と日本の二つの世界に注がれている。」[※12] と指摘している。これは陳舜臣の歴史観と社会意識は，中国の伝統的な文化の根本があるだけではなく，日本文化の影響も受け，両国の歴史・社会・伝統による総合的な要素から構築されてきたものであることが分かる。

『枯草の根』の中には，闇市場での不法金融商売に手を出す神戸市会議員吉田庄造，正義感に溢れる中央新聞社の記者小島和彦，吉田庄造と繋がりのある田村などの日本人の人物が描かれている。

---

※11　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　19

※12　奈良本辰也　2003「阿片戦争」『陳舜臣読本　Who is　陳舜臣？』集英社　63

これらの人物の日常生活の営みは華人社会と関わっている。この背景に作家は独特の視点で，華僑と日本人の関係を巧みに描き出した。このような何気なく生活上での繋がりが見られるのは，日本社会の中に潜む中国の文化的要素によるものが大きいだろう。作品の中では次のように描かれている。

> 五年ほどまえ，陶展文がまだ中山手に住んでいたころ，隣のアパートの二階からこの奇妙な体操を見て，好奇心をおこした大学生がいた。しまいにその大学生は陶展文の門をたたき，熱心に拳法を習うようになった。その大学生とは，いま中央新聞社の記者をしている小島和彦その人なのだ[※13]。

小島は拳法に興味があるために，陶展文と知り合いとなった。このように陶展文は自然に小島の太極拳の先生となる。その後，小島は陶展文の力を借りて殺人事件の捜査に乗り出す。小島は正義感が強い熱血青年である同時に，中国伝統文化に関心を寄せている。小島という人物の人間像には作家自身の二重文化意識が映っている。これは作家の内心世界が文学作品に反映されているためだと思われる。作家は自分の出身に困惑すると同時に，現実への期待もあり，その切な思いを小島の姿を通して投射している。席有仁は『東瀛遊記』で「日本人は一般に慇懃で，親切である。これまで日本を訪れた旅行者は，きまってこう報告した。――南洋を占領したころの軍人たちとはまるでちがった種族のように思える。」[※14] と述べている。これは日本人の過去と現在を理解する為に，対比のイメージを提供している。作品中の日本人の登場人物は物語を展開していく上で，幅広い社会視野を提供するだけではなく，華人社会を描く上でなくてはならない背景を引き出した。その中で，吉田庄造という人物は複雑な文化背景と経歴の持主である。

> 若いころから世界を見ちょるんだから。アメリカに留学し，北京や上海に十数年おられた。戦争中は南方で活躍された，といったような工合でスケールがでっかいよ。」……「中国におられた関係で，あちらの要人たちのなかに，ずいぶん親しい方がおられるでしょうね」「……むこうの華僑の大物とも親交を結んどられるよ。……いま一人大金持ちの華僑が神戸へ来よってな，むこうから是非会いたいと申し込んどるそうじゃ……[※15]。

作品は吉田庄造という人物像を時代の過去と現在を通して描いている。吉田庄造は日本社会の一つの側面を代表していて，彼は世界各地を遍歴した複雑な経歴を持っており，戦争中に中国で活躍し，戦後地方市議員に変身を遂げる。彼は市議員でありながら，闇市場で不法金融の取引を行っている。この人物は作品において重要人物ではないが，社会・歴史・戦争といったような背景の流れの中で，ある程度，戦後日本人の価値観や道徳意識の移り変わりを反映している。そこからも分かるように，陳舜臣の作品で表現される広い視野は，中国と日本そして世界の歴史と事実に基いてい

※13　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　15
※14　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　91
※15　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　79-80

る。

作家は自らの感じた中国歴史文化の真髄を取り出し，物語の大筋を歴史事実の辻褄と照らし合わせ，細部にフィクションによる人物を作り出し，彼らの生活そのものから歴史を解読する。特に記憶に新しい近代戦争史は真実に沿って描かれたので，その作品は高い評価を得ている。これに対して，評論家権田萬治は「陳舜臣は少年時代から江戸川乱歩の少年ものに親しんでいたが，大学時代にはコナン・ドイルやチェスタートンを原著で読むなど多くの推理小説を乱読している。しかし，氏は自らの理想像を『史記』の司馬遷に見出し，大学で専攻したペルシャ文学でもラシードの『修史』などに強くひかれる歴史家の魂を持った人物であり，その文学的教養は広くまた深い。とくに母国，中国の歴史・文学に関する知識は驚くほどである。このような氏の豊かな教養は『枯草の根』ではむしろひかえ目に抑えられているが，これらの蓄積が氏のすべての作品に文学的厚味を与えていることは否定できないように思われる。」※16 と述べた。この評論は陳舜臣という作家の文学の特徴を鋭くとらえている。

## 4．生きるために「根」を追い求めて

「枯草」という言葉には激変する世の移り変わりやその苦難さが秘められている。即ち「草」は枯れてこそいるが，「根」は依然忍耐強く根付いているという意味がある。そこからこの作品は自我を探す旅だけではなく，社会，人間性の根源を追求するという一層深い意味合いもある。「根」は陳舜臣文学の出発点，または文学創作の根源であると理解することができる。「根」に関する意味は多く，最も常用されるのは土壌の中に植えられている「根」という意味で，土壌中の水分と養分を吸収し生命を維持する。また「根」には土の下の，即ち内心の奥底など多くの意味合いが含まれている。

この小説は人物心理や性格の描写が実に人間性に溢れているという特色があり，「悪者はあくまでも悪者ではない」という作家の性善説が窺える。それゆえ，作家の人間根源を追求する仁慈と寛容の文学意識がここから分かる。これらの意識は「人間派」といわれる作家の文学審美観の特徴を現し，陳舜臣がルーツ探しから文学創作を始めようということを示唆している。この文学は「根」を大地の土に深く下し，さらに一見枯れた根毛の下に隠された深い意味合いを捜し求めていく過程である。それに対して評論家秋山駿は次のように指摘している。「陳舜臣の文学が自分は何者かということを根にしているのに，処女作を推理小説で始めた，ということに注意したい。」※17

陳舜臣はずっと国籍問題に悩まされてきた。その根本は日中近代の二つの戦争である。戦争は彼に漂泊感を与え，ずっと彼の運命を翻弄した原因の一つである。彼はこのような状況の下で文学を創作したため，作品中には知らず知らずのうちに，自我を探し求める情感がにじみ出ている。それゆえ，陳舜臣は作品中で戦争が人々に与えた戸惑い，困惑及び精神的打撃を追及すると同時に，自分の運命を決めた根源を探し求めている。彼は作品を通して，人生や運命を弄ぶ社会，また歴史の転換によって，人生の結末が変わった根本的原因を思考・探索している。そしてその動乱の社会背

---

※16　陳舜臣　1988『陳舜臣全集第二十一巻（枯草の根）』講談社　30-31

※17　秋山駿　2003「燃える水柱」『陳舜臣読本　Who is　陳舜臣？』集英社　360

景の下での自分の居場所を探し求めている。陳舜臣はデビュー前に，本職の貿易の仕事に従事する傍ら文学活動を行い，文学への執念を諦めたことがなかった。だからこそ，彼が当時の現状に不満を持っていたので，作品中の主人公・陶展文は中華料理店を生業としたが，拳法と漢方医学の研究分野でその才能を開花させる。そこから，作家と陶展文は潜在的に同じものを共鳴していることが窺がえる。作家は陶展文の人物像を作り上げるにあたって，以下のように述べている。「自分は体が小さく，けんかが弱くて，すぐ骨折したりするので，正反対の人間を理想像に仕立てた。」※18 その意味で，作家が陶展文を作り上げる過程の中で，自分の思想や感情を溶け込ませ，さらには陶展文と作家は同じ共通点を持っているが，まったく性格の異なる人物であると考えることができる。

作品の内容は日本の戦後復興時代を背景に，神戸華人社会の舞台で展開される。物語はある殺人事件を中心に，戦争とその動乱の複雑な歴史的社会的背景のもとで人間模様が繰り広げられる。作品は生業で中華料理店を経営する傍ら，趣味で探偵をする陶展文，アパート経営と高利貸しで生計を立てる徐銘義，落ちぶれて神戸で貿易会社を経営する偽者の李源良，以前本物の李源良の援助を受けたシンガポール富商席有仁など多種多様にわたる華人像を描いている。彼らの神戸に来た目的は違うが，生活を安定させ自分の事業を成功させるためには，周りと必死に戦わなくてはならない。この作品は神戸の戦後社会で広げられる様々な現実生活，華人の波乱万丈な人生経歴をもとに，異なった文化背景で人間が直面する現状をリアルに描いている。彼らは探偵，被害者，傍観者にしても，また容疑者，犯罪者にしても，すべて独特の性格を持ち合わせて，生き生きとした人物として活躍している。

作家自身の持つ「漂泊感」が作品の所々に滲み出ており，この作品に登場した人物もよく「私は誰なのだ？日本人なのか，それとも中国人なのか？」と自問自答している。この問題の本質はとても複雑で真に回答に困るものである。これは文学作品の中で「根探し」の心理と「根なし」の現状の矛盾が衝突することであり，或いは「根なし」状態と「中国感情」が相互に交差し合って，困惑した感情を反映している。作品中の善悪全ての人物は共に漂泊した経験を持ち合わせており，そして幾度の曲折の後に神戸に辿り着いた。彼らの日本に移り住んだ時期と場所は違うが，海外華人の心の奥底に潜められた「根なし」状態に対する焦燥と苦痛を反映している。そしてそれによって依存できる「根探し」に対する強烈的な意識が芽生えることを表す。

## おわりに

日中両国交流の特殊な時期，即ち日本戦後の社会背景からこの作品を評論すると，この作品の歴史的真実性が非常に高いことがはっきり見えてくる。作家は主人公を日中文化の広い視野に置き，歴史と文化という角度から独自の魅力ある人物を作り上げた。このような人物が人生の舞台で，特定の社会の歴史背景の中で各自の役柄を演じている。彼らは誰も知らない過去と現在，理想と困惑，そして生まれつきの善良と邪悪が備わっている。そのように，彼らのもろもろの感情により引き起こされた行為が世間の道徳の規制を受ける同時に，依然として人生の舞台の上で生き続けている。異なる文化背景を持つ読者は，このような異国情調に満ちた表現と特色ある人物が繰り広げる起伏

※18　権田萬治　2003「枯草の根」『陳舜臣読本　Who is　陳舜臣？』集英社　32

のある展開に引き付けられ，またその中に含まれる文化的な思想に心奪われるに違いない。それこそがこの作品の「文化的描写」の魅力なのだ。

日本の推理小説には「本格派」と「社会派」の流派がある。本格派の作品とは，殺人事件の解明を主な表現の内容として，戦後次第に人気が衰えていった。社会派推理小説の特徴は，超人のような探偵（英雄）が舞台から姿を消して，生活感のある平凡な人物を登場させることにある。また犯人は生まれつきの悪人ではなく，社会の様々な原因により犯罪を起すと考えられる。さらに社会派推理小説は凶悪殺人事件を取り扱い，社会の悪弊や政治の腐敗を摘発することによって，社会制度および時の政治への批判を顕著に表した。社会派推理小説と比べて，陳舜臣の作品は「人間派」といわれ，透徹した人間意識による人間の心理・本質を鋭く洞察力が特徴である。その意味でも，この作品は日本の推理小説の創作と発展のためには，新たな内容と異文化を吹き込んだといっていいだろう。陳舜臣がその後出版した推理小説シリーズは，全て人間性の角度から人の内面の精神世界を描いている。それは「枯草の根」のように，表面の草が枯れても，その根が持つ強靭な精神は心の奥底に深く根付いている。

陳舜臣は特定の社会背景で交差する人間の感情と恩讐による物語を通して，漂泊する運命についての主題を追及しようとしている。また作家は歴史の面影を現実生活に見出し，読者に戦争が社会に，人と人との間の感情に与えた大きな影響について考えさせ，彼自身がこの主題に対する会得や体験を小説中に散りばめている。『枯草の根』は物事を探し求める過程を描いているだけではなく，登場人物を現実と記憶の間を行き来させる特徴がある。だからこそ，この推理小説は現代社会と歴史の色合いを強く残している。陳舜臣はその作品を通して，自分自身を含むこの時代の東アジアの人々を巻き込んだ戦争を解明する意図があることは明らかである。

この作品は陳舜臣の清新な処女作でありながら，その後の推理作家という制約から脱げ出して，『阿片戦争』を始めとする中国歴史小説や現代小説などの分野で，数々の傑作を書き下ろして，その小説家の才能を開花させる始発点となる。また筆者は『枯草の根』という作品は陳舜臣の作家としてのすべての可能性が秘められている作品であると思う。その後，陳舜臣は長い文学創作への道を力強く切り開いていった。彼はこの無限の大地に自分独自の文学世界を築き上げていった。

**引用・参考文献**

曹志偉　2007「陳舜臣の文学世界」――追求・探索・超越の軌道――　中国天津師範大学文学院博士論文
陳舜臣　1988『陳舜臣全集第21巻（枯草の根）』講談社
陳舜臣　2003『陳舜臣読本　Who is 陳舜臣？』集英社
新保博久・山前譲編『江戸川乱歩賞・日本探偵小説事典』河出書房新社
笠井潔　1998『探偵小説論Ⅰ氾濫の形式』東京創元社
内田隆三　2001『探偵小説の社会学』岩波書店
権田萬治　1975『枯草の根（評論）』集英社
秋山駿　1977『燃える水柱（評論）』角川書店
奈良本辰也　1973『阿片戦争（評論）』講談社
井上ひさし・小林陽一　2003『座談会・昭和文学史』集英社
饶凡子 2005『世界華人文学的新視野』中国社会科学出版社
高小剛　2006『郷愁以外』人民文学出版社
蒲若茜　2006『族裔経験和文化想像』中国社会科学出版社